ニッポン人に気をつけろ

広岡まり ●ニューヨークと私——

奇想奇抜、国境を突きやぶる
ことばと発想、
ミステリとペーソス——
誰にも書けなかった
イーストサイドは
マフィア・ドリスの物語！
ライバルはジャパだ！
女流画家広岡まりの
型やぶりの
ニューヨーク・シリーズ第一作！

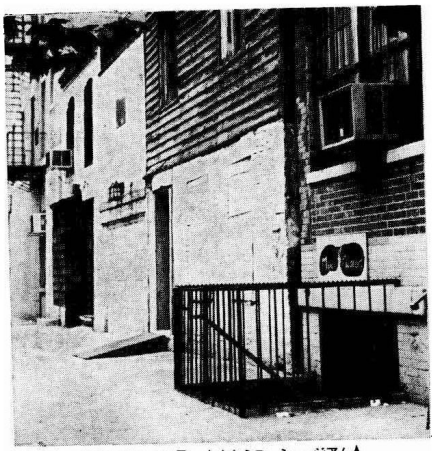
サイマル出版会

広岡まり

ニッポン人に気をつけろ

ニューヨークと私

サイマル出版会



著者が開いた世界一小さなミニ・ミュージアム▲

サイマル出版会のめざすもの

サイマル出版会は、激動する現代史の創造に読者とともに参加する姿勢で、国際的言論活動を展開するべく出発した。思えば、人類は平和のために戦争を続け世界は一つであることを願いながら分裂し続けてきた。科学の発展は、電子情報時代をもたらしたが、情報の同時性は、また単純同一反応性をも生み、新たな誤解に苦悩する結果となっている。われわれは、こうした新たなる誤解による相剋の根をとり除くために、また世界の指導国家として再登場した日本の国際的資質を豊かにし、国内の諸課題を鋭角的にとらえ、国際間の理解を深めるための現実的歴史的素材を提供しようと志すものである。そして地球上のコミュニケーションを円滑にすることによって人間の条件を回復し、世界が平和に一つに運営統合される事業に、言論活動によって寄与しようと念願するものである。このささやかながらも高き理想に精進せんとするわれわれに、幸いにして読者諸賢のご支援を期待してやまない。

（サイマルの本の版権記載は、本扉裏にあります）

（著者紹介）

広岡まり（ひろおか）

本名・篤子。1930年東京に生れ、順心高等女学校を経て、石川県立高女を卒業。画家となり、着物に絵を描くなどして収入を得る。66年アメリカに渡り、デンバー、サンフランシスコからニューヨークに移り、イーストサイドに世界一小さな美術館ミニ・ミュージアムを開設、下町の住人たちのなかでユニークな活躍をしている。

連絡先・ 205 East 29ST. N. Y., N. Y., 10016

(P. O. Box 506 N. Y., N. Y., 10016)

マフィア・ドリスの物語（まえがき）

今から七年まえ、私はアメリカへ行った。デンバー、サンフランシスコをさすらって、行きついた先はニューヨーク。

ニューヨークでは最初ランプ屋。一週間めに壁画とか、その他美術品をあつかっている大きな会社につとめたが、このままでは自分がだめになることに気がついて、一年半でそこをよして、独立した。

急だったから生活はすぐ困ったが、苦しまぎれに動きまわった。イーストサイドの、昔大火事があったビルで、今は使われなくなっていた地下室の、半分倉庫になっていたのを「自分で掘りおこして再建すれば、ただで貸してやる」といわれた。毎日行って地面、ビルの外側、道路のはじっこからコンクリートをはがして入口をつくり、まるまる二年は穴掘りで、物事は思うようにならなかった。

だが、それもだんだん形がついてきて、道ゆく人は眼をみはって楽しんでくれた。隣の家のこわそうな赤毛の大男も声をかけるようになった。「これを新しいアートの発表の場にするんだ。天井も壁もみんな私がつくって」そう言った。そのアンちゃんは、「よし！

俺が力をかしてやる。こんなにがんばっているのに誰も手をかしてやらないなんて、アメリカの恥だ。おまえは日本のレディだもんな。ガンバレよ、俺も明日から早おきだ」

早おきは三日坊主だったが、アンちゃんは私の絵を文句なく買い続けた。ほかの宇宙の生き物、一つ眼や三つ眼の空飛ぶ円盤は、「これがいい、気にいった」ととても高い値をパラリと払ってくれた。そのときはアンちゃんがマフィアだとは、まさか全然見当もつかなかった。だから安心して、私はアンちゃんにあまえていた。

途中ケンカしたこともあったが、「ユー・アングリイ・ミイ」とすごんでみせても、彼はやはり私を助けるためにのぞきにきた。「明日の芸術は宇宙を創造することと、他の宇宙と交流するパワーを発見することだ」が、そのテーマの私とアンちゃんの努力がミニ・ミュージアムだった。アメリカに宇宙発見のための科学はあっただろうが、その考えを絵にした。街の流行を、一時的にも宇宙の話題でさらったのは、貧しいながら、私――ミニ・ミュージアムの誇りだ。

安物でしかない材料、手間もこの手先きで、日本人からみたら貧乏小屋でしかありませんが、私はそこでキレイなキレイな絵を毎日かいている。日本に来ているとき以外は、そこにいて絵をかいているのです。小学生や中学生が私のマンガをほしがってくれるときが、私が生きている、この世のだいごみです。

＊

これは、そのアンちゃんことドリスの物語です。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ドリスの話は、最初は私の生活日記だったために、だらだら書きの三年分でした。ザラ紙やノートに書いていました。自分を励ますために、どんなに疲れていても、あけ方アパートに戻ってベッドのわきにすわりこみながら、一枚ずつでも半枚でも、その日その日の人びとのようすや、きいたことを書きました。純粋な人は心が強いが、その私の強さだけが残って、気持はだんだんすさんでゆくのがよくわかるので、それを毎日洗い流して、死ぬときまで、アメリカに向けて日本を発ったあの日と同じようにしておきたいので。そのために、シャワーをとる時間でこの話を書いたのです。

この話は、はじめはサンフランシスコの日米タイムスに連載していただいたのですが、スタジオづくりと、オープニングのための仕事や金ぐりに追われて、ついに暇がなくなり、途中でやめました。映画「おかしなおかしな大泥棒」のモデルもドリスです。

去年も、一昨年ごろも、私は荒れくれていました。すさみにすさみ、悪霊がついているように。でも、この本がつくれて、気がやすまり、もとの私に戻ります。本来は愛情いっぱいの人間なのです。この本から、小さい芽を出して木になり、ひたむきに根をおろし、きっと世界に向けて、その根は生きつづけます。ひたむきな根は決して枯れません。

＊

ニューヨークのアメリカ人。若い人や年よりや、私の友だちは「本がいつ出るか」と繰りかえし言って、首を長くして心配してくれていました。こんど本がつくれて、みんなはどんなに嬉しがってくれるでしょう。みんなは長いあいだ、私のために自分のサラリーの

うちから、必ず毎週のように応援してくれました。海とも山ともつかぬ私の芸術はともかく、私の努力を認めてくれていました。この本は、その人たちの三年がかりの汗ですから、それで喜んでくれるのです。

サンフランシスコの日本時事の浅野さんが、かげになり、ひなたになり、また銀行の人びとも、私が好きなことをできるように心配してくださいました。

マフィアのアンちゃんやみなさんの力がなかったら、もう、いろんなことがありすぎて、私は死んでいました。

お母さんに苦労、娘にも苦労させて。娘を預ってくれる人にも苦労だらけで。娘がのびのびと大学に行けるように、明るく育ててくれたその人のお母さんも……好きなことをして本を書いて。ごめんなさい。

サイマル出版会代表の田村勝夫さん、田村編集長に私を紹介してくれた海上雅臣さん、私のようなものを引きあげてくださって、ありがとうございました。竹内正年編集次長、諏訪部大太郎企画次長はじめサイマルのみなさん、お世話になりました。

自分の眼が、いま、空より蒼く輝いているのがよくわかります。

（一九七三年七月、東京・青山にて）

広岡　まり

目次

無作法者はあの世ゆき
アメリカの犬は悟っている
決してキュウキュウ言わない

マフィア・ドリスの物語（まえがき）

第一部　ニッポン人に気をつけろ

1　ドリス、マフィアに足を入れる……三
2　カンニン袋の緒が燃える……一三
3　千ドル札の英雄……二三
4　ライバルはジャパだ……三四
5　テーキリの甘いワナ……四六
6　みんな怪しいぞ……五六
7　夕焼けが赤すぎる……七〇

第二部　ドリス対日本人

8　ドリスは呼びかける……八五
9　ジョーハクは二重仮面……九七
10　五はファイブだ……一〇九
11　カニイは逃げた……一一九
12　ワナにかかったチョイ将軍……一三一
13　危ないことには目をつぶれ……一四一
14　クッキイちゃんの赤いバラ……一五三
15　ニューヨーカーの心意気……一六五

第三部　マフィアと私

16　マフィアと秘密兵器……一九九
17　三十番街のライブラリイ……一八九
18　ムホンの発端……二〇〇
19　ニューアークの地下人間……二二
20　この電話は聞かれている……二三
21　狂いはじめたニューヨーク……二三
22　人間死ねばパンケーキ……二四

装画・挿絵＝広岡まり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一部

ニッポン人に気をつけろ

1　ドリス、マフィアに足を入れる

日本人たちがするように、カリオカはもみ手をしながら連れてきたドリスを紹介した。

「こいつが、きのうの話のドリスって奴です。仕事がなくって困っているから、どうぞ雇ってやって下さいよ。おねがいだ」と、おっかなびっくりしているドリスを「お前も挨拶ぐらいしろ！」とつついた。

ボスのビッカーは、エキストラ・ラージ（特大）のシャツがボタンもはじけそうに太った腹を突き出し、短く外側にくの字につっぱった格好のわるいズボンのポケットに両手をつっこんで、カギや小銭をチャラチャラいじりながら、にらむように二人をジロリと見た。ユダヤ独特の用心深いひとみの開いた大きい目だ。

「オーライだ！　いいともよ、だがよ、カリオカ。お前はこの商売に足をつっこんでからもう長いから、ずいぶん話もわかりよくなったと思うんだがねえ。ホットドックの商売ってやつがどんなもんかをさあ！　仲間うちの規則、金銭のやりとり、つまりこの商売は決してあまくないってことを、こいつが承知してお前に頼んで来たのか、それとも、ホットドックは日銭かせぎになりやすいし、腰掛け程度のつもりで来たのか、了見はどっちかで、俺としても使いわけなくっちゃなんねえから、こいつの本心をもっとよくたしかめて、今夜八時すぎにまたゆっくり会うことにしようじゃないか。八時すぎにまた来てくれよ」

「ハ！　ハイ、イエス、そうしますよ」

親分ビッカーに会ってから

カリオカはなんだか気が暗くなるような感じでイエスといった。だって今までの経験を思い出せば、こんな面倒くさいことを新入り希望者に面と向って言った

ためしはなかったのだ。人手不足で空いた車の屋台は、倉庫の奥にたくさんゴロゴロしているし、つい先だっても、

「おい！　誰か失業者がいたらどんどん連れて来いよ。アメリカじゅうの景気がどんどん下がれば下がるほど、地下鉄代と同じ三十五セントで買えるホットドックは大繁盛で、ソーセージの仕入れが間に合わないほどの大バカ儲けは確実だ。今のうちにどんどん儲けておいて、いよいよ景気がもちなおすころには、ほかの商売に資金を貸すくらいの心がけでいないと出世はできねえぞ！　いいか、男女をとわず、手があいていてゼニの欲しい奴がいたら、片っぱしから連れて来るんだ！」

とわざわざ演説口調で、ビッカーは部下の皆に言いわたしたばかりなのだ。

猫の手どころかネズミの尻尾まで欲しがっているビッカーが、せっかく連れてきたドリスにむかって、針をさすような冷たいことを言ってくれたのは、いったいどういう気まぐれだろう。ドリスも何かいや気がさして、カリオカに責めたてられて心を動かしかけたこの商売を、片足も、まだつま先もかけないうちにやめたくなった。

俺はやだ！　せっかく紹介してくれたけど、この話は出発なしの駅止めだ。これでバイバイだと、ばっちり断わってしまいたかったが、生れつきの気の弱さが、その言葉をノドチンコのところでむずがゆく止めてしまった。

「ドリスよ」カリオカは他人の胸のうちまで読める人間ではないから、ドリスがもうやる気がなくなってしまったのがわからない。「ドリス、親分がああ言うのは、今夜ゆっくりと時間をかけて話し合いたいのかもしんねえから、どうだ、昼間のうちは俺といっしょに車をひいて、俺の売り方を見習っちゃ。そうしろよ！」

「でもよう……」

「でももへちまもあるか、尻ごみするこたあねえ。俺は遠慮されると腹が立つ性分なんだ。困ったときはお互いさまだ。頼ってくれよ！　それにお前、そんな気弱で今夜親分に会ったって断わられちまうぞ。仕事が欲しかったら、元気よく、意気ごみってものを見せな

くっちゃあ。さっきまで雇うつもりだったのが、調子が狂って断わりたくなるかもしれない。特に親分ビッカーはその感情が烈しい人なんだから、しっかりしてくれないと俺は怒るぞ！」

単純な人間は怒り方も単純ではっきりしている。ドリスは「うん」と返事をして、カリオカが仕度した屋台に手をかけて、申しわけ前へゴロゴロと引きずった。

「なんだおめえ、今日のショバもきかねえで、どこへ引っぱろうってんだ。ちょっと待ちな。親分にきくの忘れちまったじゃないか、お前のおかげでよう。ボヤボヤすんなよ」

人に何か世話するとき、人間は誰でもこういうふうに意地わるく恩をきせるものだ。ましてや、きのうまではとても良かった者が急な落ち目に苦しんで頼ってくれば、それは美味しい肉の獲物を初めて食う動物のように、人は、本性から本性の内側の隅々までのぞかせて、汚れたことを平気で言ったりしたりするものだ。生存競争の回転が特に烈しいニューヨークの下町では、それがまた赤裸々で、ものすごいのだ。

ゴロゴロガタガタ、カリオカが引っぱる屋台に不馴れな調子でくっついて、ドリスはアップタウンへとむかった。そこいらの窓々の開いていたやつがバタンバタンと音をたてて閉まり、ニューヨークの人たちの出勤前の戸締まりに忙がしい時間だ。

（八時から八時二十分、三十分頃のニューヨークの街の雰囲気は、他の国の大都市の朝のにおいとはまったく別物で、ダイナミックな熱っぽい風が渦まいている。道路はきたない。食べるカンヅメの種類によって犬のフンは色とりどりで、黄色いのや赤いのや、白っぽい粉のふいているのもあり、一面、いたるところに、できたてのほやほやの新しい湯気をたてている。ペプシコーラやコカコーラのビンのフタも、犬のフンと同じく道路一面に散らかっていて、散らかったままで潰れ、永年永久に道路の模様となり、五十年以上前からのペプシのフタは、ただの茶色のサビた星になってすりへってへこんでいるのもあり、ぎざぎざのはじっこだけが地面にくい入って残ってしまったのもある）

地獄の六十三丁目

「俺も先週までは、ああして時間にしばられていたサ

ラリーマンだったんだ。仕事にしばられていたときはフリーになりたいと思ってたが、こんどクビになって自由の身になってみると……こんな寂しいもんだとは知らなかったよ……」

「男らしくもねえ、感傷にひたってるやつがあるか！しっかりしろ。失業するのはおめえひとりじゃねえんだぜ。不景気で、会社って会社が片っぱしからつぶれたんだ。右向きや左のおいそれで、俺と知り合って次の日はもうこうして仕事に連れだってもらえる奴なんて、そうそうザラにはいないぞ。おめえは幸運をありがてえとも思わないで、そんな了見じゃあ、ニューヨークってとこでは生きられねえ。働く仕事に悪いもいも差別はねえや！　だから俺は、頭でっかちのインテリなんて、本当は能なしのバカヤロだってんだよ」

カリオカは弱気のドリスを元気づけるつもりで、声を荒げながら屋台を急がせた。

「場所はどこ？」

「だまってついて来な！」

屋台は六十三番街のサードアベニューのかどまで来てキュキュキュと止められた。

そんなことになりゃしないか――と、ドリスはずっと心配しいしいついて来た。心配は大あたりで、カリオカが親分ビッカーにもらった今日のショバは、ドリスにとっては地獄の六十三丁目であった。

そこのむこう側にそびえるビルは、インテリアデコレーター・ビルディング――彼はその六階の会社に、先週まで勤めていたのである。腕ききのサラリーマンで、そのあたりでは彼を知らない者はない。上の階の会社でも階下の者たちでも、つい先だってまでの同僚や取引先での友だちも、皆はまだそのビルの中で無事に働いているのだ。

そのビルには約百社近いインテリア・デザインの会社がひしめき合い、全米からばかりでなく、世界のインテリア業界がここに集まっているといわれている。ここに勤める社員たちは上役からはしたまで、服装も色とりどりに洗練されたファッションだし、言葉もいわゆるニューヨーク語と称される、活気のあるトンチの火花がツーカーと光る会話で、暗号みたいなものである。

ドリスは十一年もそのビルの階段を踏んだセールス

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com